

グリム・メルヒェンにおける森の諸相(I) : 「自然の事物」をめぐって

大野, 寿子
愛知教育大学

<https://doi.org/10.15017/21864>

出版情報 : 九州ドイツ文学. 20, pp.59-91, 2006-10-10. 九州大学独文学会
バージョン :
権利関係 :

グリム・メルヒェンにおける森の諸相 (I)¹⁾

—「自然の事物」をめぐって—

大野 寿子

はじめに

グリム兄弟編集の『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen, 以下 KHM と略記する) で頻繁に描かれる森は、特殊な性質を帯びている。森は日常生活と関わる場である一方で、人間の言葉を話す動物、魔女、小人、巨人といった不思議な存在との出会いの場、超自然的な出来事に遭遇する場ともなる。日常性と非日常性という、相反する両性質を併せ持つグリム・メルヒェンの森は、人間を生へと導くポジティブな側面と、死へと導くネガティブな側面という両極性をも有する。また、ウラジーミル・プロップの形態論的機能分析によれば、森という空間は、物語の始点から終点にかけて通過すべき空間として位置づけられるとともに、森を通過するメルヒェンの基本構造が、太古の通過儀礼に立脚するとも見なされる。²⁾ このような先行研究をてがかりに論者自身もまた、グリム兄弟の理念に深く関わる「森」という空間の重要性を論じた。³⁾ しかしながら、その論の根拠となる、KHM の森の詳細な分析データの提示には至ってはならず、森の空間的重要性が具体的に示されていない。

KHM の登場人物は、マックス・リューティの言にしたがえば、感情をあまり持ち合わせてはならず、その性格は、たとえば悪人ならば「黒」、善人ならば「白」というように、外見上で端的に表現されていることも確かである。しかしながらグリム兄弟は、主人公を含めた登場人物の内的自然ともいべき「心情」を、風景に、特に森の自然に投影させて描くことを欲し、その理念にしたがって加筆を試みた可能性がある。メルヒェンの登場人物の性質や感情に関してリューティは、それらが「話の筋の中で表現されている」と語り、感情等が物語の中で間接的に表現される可能性を指摘してはいるが、内的自然としての「心情」と外的自然である森の描写との密接な関わりにまで積極的にふれてはいない。⁴⁾ 本論考は、その可能性の立証を目的に、森の描写のデータを示し、上述の先行研究の補強をめざす。ここではまず、KHM の森を外部から眺めたときの描写を概観し、その森が、侵入する人間に対してどのように位置づけられるかを分析し、作中人物が森へ入る動機や目的を七つに分類する。

単調でむしろ普遍性を帯びているといっても過言ではない KHM の森ではあるが、中へと一歩足を踏み入れると、そこには多種多様な事柄が満ちている。森の構成要素はまずもって、レヴィ＝ストロースの二項対立による分析方法に範を得、「動くもの」と「動かないもの」とに分類される。前者は主に「人物、動物、鳥類、昆虫類」を指し、後者は「事物」

を指し示す。後者の多種多様な「事物」はさらに、「自然に生成したもの」と「人工的に作られたもの」とに分類される。本論考においては、「事物」の中でも特に多様性に富む「自然の事物」を分類および分析する。また、ここでは、グリム兄弟の最終的な意思を拾い上げることが目的であるので、テキストには、1857年に刊行された KHM 第七版決定版を使用し、必要に応じて加筆過程をも検証する。⁵⁾ さらに、森における樹木の機能を大きく五つに分類した資料をまとめ、補遺として示す。

1. 森の外観

KHM 最終決定版である第七版は、200話の「メルヒェン」(KHM151が二編収録されているので実質は201話)と10話の「聖人伝」(Kinderlegenden、以下 KL と略記する⁶⁾)とで構成されている。KHM 全210話における森を表す語(合成語を含む)と、それに付随する形容詞とを表にまとめると、以下のようになる。数字は、KHM の1から210までの通し番号を示す。方言表記のテキストは斜体で示す。

1	Wald+groß und dunkel	40	Wald+dunkel
3	Wald+groß/Waldplatz/ Waldbeeren	44	Wald
5	Wald	45	Wald+ groß
8	Wald	46	Wald+finster
9	Wald+groß, wild	47	<i>Holt+ganß</i> (ganz)
11	Wald+groß/Waldhäuschen	48	Wald
12	Wald	49	Wald+groß/Waldschloß
13	Wald	51	Wald
15	Wald+groß/Hexenwald	52	Wald+groß, schön
17	Wald/im Felde und Walde	53	Wald+groß, wild
20	Wald	54	Wald+groß, einsam
22	Wald+groß	55	Waldecke
23	Wald/Holz	57	Wald
26	Wald (eine halbe Stunde vom Dorf)	59	Wald
27	Wald	60	Wald/Zauberwald (so groß, daß sie unmöglich in einem Tag heraus konnten)
28	Wald		
29	Wald+groß	62	Wald
31	Wald+groß, groß und wild	64	Wald
33	Wald	65	Wald+groß
36	Wald	68	<i>Wold+graut</i> (groß)
37	Wald	69	Wald+groß und dick/ins dunkle Grün des Waldes
38	Waldtiere		
39	Westerwald	71	Wald

73	Wald	137	<i>Wold+graunt</i> (groß)
74	Wald	138	<i>Walle+allmächtig groot</i> (groß)
75	Wald	141	Wald+groß
76	Wald	142	Wald
80	Wald	146	Wald
81	Wald	147	Wald
85	Wald+groß	153	Wald
88	Wald/durch alle Felder und Wälder	157	Wald- und Dorfvöglein
90	Wald/Holz	161	Wald
93	Wald+dunkel	163	Wald+groß/über Stock und Stein, Berg und Tal, Wiese und Wald
97	Wald		
99	Wald	165	Wald/Holz
100	Wald	166	Wald+tief und finster, schwarz, grün / Holz
102	Wald		
103	Wald	169	Wald+einsam/Feld- und Waldsperlinge/Waldvogel/Waldtauben/Waldhaus
106	Wald		
107	Wald+groß/aus dem Wald/ vor dem Wald auf dem Feld	171	Wälder/aus Wäldern und Feldern
		174	Wald+benachbart
108	Wald+ganz, groß	179	Wald+groß, wild, ganz
111	Wald+sehr groß	181	Wald/durch Feld und Wald
113	<i>Holt/Wall+grot</i> (groß) / <i>Wallnütte</i>	183	Wald+ganz; wild und finster
116	Wald	191	Wald
121	Wälder/durch Felder und Wälder	193	Wald+groß, ganz; finster/ von Gärten, Wäldern und Wiesen / Waldhäuschen/Waldhaus
122	Wald+dick		
123	Wald+groß		
125	Wald	197	Wald+groß
127	Wald+groß, groß und wild, Wild, grausam und wild	199	Wald
		201	Wald+gorß
128	Wald	202	Wald+groß
132	Wald+ganz	203	Wald
134	Wälder/über alle Wälder und Felder	206	Wald
136	Wald+dunkel, ganz, groß, gefährlich, finster	210	Wald

森を表す語は Wald にほぼ統一されており、KHM84話、KL 5 話、合計89話に登場する。Wald の複数形 Wälder が記されているのは KHM121、134、171 の 3 話であり、複数形 Wälder と単数形 Wald が重複する形で登場するのは、KHM88、193 の 2 話である。Wald が合成語に含まれて登場するのは、KHM38 の Waldtiere (森の諸動物)、KHM55 の

Waldecke (森のはずれ)、KHM157の Wald- und Dorfvöglein (森や村の小鳥) の3話である。その一方で、Wald を含む合成語と Wald という単語とが重複して記されているのは7話、すなわち、KHM3の Waldplatz (森の空き地)、Waldbeere (森の漿果)、KHM11の Waldhäuschen (森の小さな家)、KHM15の Hexenwald (魔女の森)、KHM49の Waldschloß (森の城)、KHM60の Zauberwald (魔法の森)、KHM169の Feld- und Waldsperlinge (野や森のスズメ)、Waldvogel (森の鳥)、Waldtauben (森のハト)、Waldhaus (森の家)、KHM193の Waldhaus (森の家)、Waldhäuschen (森の小さな家) である。Hexenwald, Zauberwald が非現実的な森の性質を表わす一方、それ以外の合成語 Waldplatz, Waldbeere, Waldhäuschen, Waldschloß, Feld- und Waldsperlinge, Waldvogel, Waldtauben, Waldhaus は、森の性質とよりはむしろ、森の一部あるいは付属物を示す。いずれにせよ、森にまつわるこれら諸々のことばには、地域特定につながる要素が欠けている。唯一 KHM39にのみ、固有名詞 Westerwald (ヴェスターヴァルト、ヴェスターの森)⁷⁾ と記されるに留まる。また、KHM23, 90, 165, 166の4話では、森を表す語に Wald だけではなく、本来は「木材」を表わす語である Holz もが用いられている。さらに、方言で記述されたテキストに登場する森、すなわち KHM47の Holt, KHM68の Wold, KHM113の Holt と Wall, KHM137の Wold, KHM138の Walle をも含めると、全210話中101話に森が登場していることになる。⁸⁾

ところで、Wald を直接形容している形容詞の種類は極めて少ない。頻度順に列記すると以下ようになる。方言は斜体で記す。

形容詞	KHM	形容詞	KHM
groß (大きな)	1, 3, 9, 11, 15, 22, 29, 31, 45, 49, 52, 53, 54, 65, 69, 85, 107, 108, 123, 127, 136, 141, 163, 179, 193, 197, 201, 202	dunkel (未知の、暗い)	1, 40, 93, 136
<i>groot</i> =groß	111 (+sehr)	einsam (物寂しい)	54, 169
<i>graut</i> =groß	68, 137	dick (鬱蒼とした)	69, 122
ganz (全体的な)	138 (+allmächtig)	schön (美しい)	52
<i>ganß</i> =ganz	47	grausam (恐ろしい)	127
wild (野生の)	108, 132, 136, 179, 183, 193	gefährlich (危険な)	136
finster (真っ暗な)	46, 136, 166, 193, 183	tief (深い)	166
		schwarz (暗い)	166
		grün (緑の)	166
		benachbart (隣の)	174

森という語を直接形容する形容詞は、101話中14種類と極端に少ない。方言表記のテキストには、方言で記された形容詞が付随するのだが、本論考では意味重視の観点から、同意義の標準ドイツ語形容詞と同等に取り扱う。⁹⁾ まず、groß (大きい) が29話と一番多く使用され、その中には、sehr (とても) で強調されたものも含まれる。groß の方言と見なしうる groot や graut をも含めれば、全体で32話となる。¹⁰⁾ 次に多い形容詞が6話に登

場する ganz (全体的な) であり、その方言形と見なされる ganß をも含めると 7 話となる。しかしながらこの形容詞は、森の状態を直接形容するというよりは、「森全体」を歩き回った、「森中で一番云々」というように、人物の行動もしくは森以外の任意の事物の性質を、森という語を使って強調する目的で使用されることが多い。したがって、森の形状を形容する前述の groß と、コンテキスト上で同レベルと考えるかの判断が難しい。第三番目に頻度の高いものは wild (野生の、荒涼とした) で、6 話に登場する。第四番目が finster (真っ暗な、暗澹とした) の 5 話、第五番目が dunkel (未知の、暗い) の 4 話である。第六番目が einsam (物寂しい)、dick (鬱蒼とした) であり、それぞれ 2 話ずつに登場する。第七番目は schön (美しい)、grausam (残酷な)、gefährlich 危険な)、tief (奥深い)、schwarz (黒い)、grün (緑の)、benachbart (隣接する) という形容詞であるが、それぞれ 1 話ずつに登場するに留まる。ganz は上述どおり森以外の事物や人物の性質や行動を強調するため、森の様態を直接表現しているとはいえない。しかしながら、「森全体」、「森中」という表現によって、森が広大である意が伝わるともいえる。benachbart はあくまでも、地理的位置を表すのみである。grün と schön とが、比較的明るい印象を与える一方で、残りの形容詞においては、森の不気味さ、不可思議さ、大きさ、深さが表されており、前出の grün と schön に比べれば、暗い印象を与えうるというコントラストを指摘することもできる。いずれにせよこれら森に付された形容詞群の共通点は、そのどれもが、地名等の地域性には直接結びついてはならず、語り手の印象、もしくは森に対峙する作中人物の印象として記されている点である。作中人物のむしろ主観に基づくといっても過言ではないこれらの表現が、聞き手や読み手の個々の経験からくる主観や印象と、容易に共鳴しうる。このような、普遍性への傾向もまた、森に付された形容詞の特性といってもいいだろう。

森の頻度に比べ、形容詞の種類が極端に少ない点、すなわち「形容詞の単一性」die Einheit des Beiwortes を、マックス・リュートは、メルヒェンという語りの形式の特性の一つに挙げている。¹¹⁾ メルヒェンにおける「単なる名詞記述」die bloße Benennung、すなわち、詳細な叙述を避け、形容詞を単一化するというこの「純叙事詩的技法」echt epische Technik が、指名された事物に「はっきりとした輪郭」feste Kontur を与え、「単純な像」einfache Bildchen を成すのである。「メルヒェンの主人公がさまよう森は名詞で記述されるだけで、詳しい叙述は決してなされない」という特性も、リュートによれば、メルヒェンの様式全体が、「形式の固定性」Formbestimmtheit を目指していることの一例にすぎない。¹²⁾ つまり、KHM における森という単純な名詞の記述も、限られた形容詞も、メルヒェン形式ゆえに現れうる特性と見なすのが、リュートに代表される多くのメルヒェン研究者の見解である。しかしながら、そう決めつけるにはいささか危険が伴う。まず、リュートの唱えるメルヒェン形式の法則が、主に KHM 等のテキストの分析から帰納的に導き出されたものである以上、その法則を単に KHM へと当てはめ演繹的に解釈すれば、論理の堂々巡りとなる危険性が生じる。¹³⁾ すなわち、リュートのメルヒェン分析は、そもそもグリム兄弟のメルヒェン観に多分に依拠している点、あるいはその可能性が少な

らず存在するという点を見過ごしてはならない。¹⁴⁾

2. 森と主人公との関わり

次に、森がグリム・メルヒェン中でどのような役割を果たしているかを概観する。この場合、作中人物が森へ入る行為¹⁵⁾、もしくは人物（動物）がそこに居る状態が、次図のとおり、必ずといっていいほど見受けられる。

KHM	行動と状態	KHM	行動と状態
1	入る	51	入る
3	入る	52	入る
5	入る、動物メルヒェン	53	入る
8	入る、動物メルヒェン	54	入る
9	入る	55	側
11	入る	57	入る
12	入る	59	入る
13	入る	60	入る
15	入る	62	入る
17	入る、比喩表現	64	入る
20	入る	65	入る
22	入る	68	入る
23	居る、動物メルヒェン	69	入る
26	入る	71	入る
27	入る、動物メルヒェン	73	入る、動物メルヒェン
28	入る	74	居る、動物メルヒェン
29	入る	75	入る、動物メルヒェン
31	入る	76	入る
33	入る	80	居る、動物メルヒェン
36	(入る)、動物メルヒェン	81	入る
37	入る	85	入る
38	所属関係、動物メルヒェン	88	入る、比喩表現
39	比喩表現	90	入る
40	入る	93	入る
44	入る	97	入る
45	入る	99	入る
46	入る	100	入る
47	比喩表現	102	居る、動物メルヒェン
48	入る、動物メルヒェン	103	入る
49	入る	106	入る

KHM	行動と状態	KHM	行動と状態
107	入る	161	入る
108	側、入る	163	入る、動物メルヒェン
111	入る	165	入る
113	入る	166	入る
116	入る	169	入る
121	入る	171	出る、比喩表現、動物メルヒェン
122	入る	174	出る
123	入る	179	入る
125	入る	181	入る、比喩表現
127	入る	183	入る、比喩表現
128	入る	191	入る、所属関係
132	入る、動物メルヒェン	193	入る
134	比喩表現	197	入る
136	入る	199	入る
137	入る	201	入る
138	入る	202	入る
141	入る (出ない)	203	入る
142	入る	206	入る、居る
146	(入る) 通過	210	入る
147	入る？	入る：89話 居る、所属、出る：7 + 1 話	
153	入る		
157	比喩表現、動物メルヒェン		

人間か動物かを問わず、主人公が森へと「入る」話は、森が登場する101話中89話であり、森が登場する話の中では約88%を占める。このことは、主人公が物語の始点において、森の外にいるということが前提となる。主人公が森へと向かって空間移動することと、物語の進展とは重なっているのである。¹⁶⁾ この「入る」という行為には、「通過」の概念、さらには森から「出る」という概念が潜在的に含有されている。¹⁷⁾ なぜならこれらの話の中で、外から森へと入った主人公が、最後まで森に留まる話は極めて少ないからである。¹⁸⁾ 主人公が話の発端から森に「居る」、もしくは森から「出る」設定であるメルヒェンは、101話中7話 (KHM23、38、74、80、102、171、174) に留まる。また、森へ「入る」メルヒェンに、森に「居る」行為が重複している話が KHM206 であるが、便宜上、森へ「入る」メルヒェンと見なす。101話中残りの5話のうち、主人公が常に森の「側に居る」話が1話 (KHM55) ある。森へと「入る」メルヒェンの話の発端で、主人公が森の「側」や「前」に「居る」描写、もしくは「住んでいる」描写は多く見られるが、それらは、森へ「入る」という後の行為の前段階と把握できる (たとえば KHM15 や KHM108 等)。ただ KHM55 だけは、主人公も、また、主人公の運命に関与する存在 (小人レンペンシュティ

ルツヒェン)も、森の内部ではなく森の「側に居る」話となっている。残りの4話(KHM 39、47、134、157)において森は、慣用句や直喩表現として登場する。これらを一括して慣用句的で詩的な「比喩表現」と見なす。この比喩表現が、森に「入る」話と重複しているのが、KHM17、36、88、163、181、183であり、森に「居る」話と重複しているのがKHM171である。

アンティ・アールネ／スティス・トンプソンの『民間伝承のタイプ』(二人の頭文字を取り、以後ATと略す)において、メルヒェンは五つに分類されており、その中でも次の三つのジャンル、すなわち「動物メルヒェン」、「本格メルヒェン」、「笑い話」の枠組みが重要となる。¹⁹⁾ 本論考においては、KHMの主人公の態度に従い、「動物」が中心に話が展開する「動物メルヒェン」と、それ以外のメルヒェンとに分けて考える。したがって、内容的には第三番目の「笑い話」に本来属するはずの話も、人間が中心となるメルヒェンに組み込み、便宜上「人間メルヒェン」とする。

森の登場する101話中、AT分類での「動物メルヒェン」は15話(KHM5、8、23、27、36、38、48、73、74、75、80、102、132、157、171)である。その中の例えばKHM36は、AT分類においては、動物メルヒェン(AT212)と本格メルヒェン(AT563)の両方に属している。しかし本論考では、人間が主人公である点を重要視し、「人間メルヒェン」に分類する。したがって、森が登場し、動物を主人公とした動物メルヒェンは、KHM5、8、23、27、38、48、73、74、75、80、102、132、157、171の14話となる。この中で森に「入る」動物メルヒェンは、7話(KHM5、8、27、73、75、132)である。この7話では、物語の始点において、森以外の場所、すなわち森の外部にいる動物が主人公となり、その動物の森への移動が、話の道筋と重なっている。残りの7話(KHM23、38、74、80、102、157、171)中、動物が森に「居る」状態で話が始まる話、もしくは動物が森に所属していることが前提となる話は、6話(KHM23、38、74、80、102、171)である。残りの1話(KHM157)において森は、単に表れるのみであり、先に規定した比喩表現の一部に留まる。²⁰⁾ したがって、森が登場する動物メルヒェンの場合には、その半数近くが森を、動物の「居る」場所としてあらかじめ設定していることとなる。

森の登場する101話の中で、人間を主人公とする話(人間メルヒェン)は87話となる。その87話中、主人公が森へ「入る」話は82話、全体の約94%である。²¹⁾ 森の側に居たまま森に入らない話が1話(KHM55)、最初から主人公が森の内部に「居る」話が1話(KHM174)、比喩表現に森が用いられる話が3話(KHM39、47、134)である。森に「入る」行為と、森を含む比喩表現とが重複している話が、KHM17、36、88、163、181、183の6話であるが、これらは便宜上、森へ「入る」話に数える。

これらの統計資料を分析することにより得られた結果は、以下のとおりである。

1. 森が登場する話が、KHM全体(210話)の半分近く(101話)を占める。
2. 森が登場する話には、森へ「入る」行為で物語が展開する話が101話中89話ある。
3. 森の登場する話を「動物メルヒェン」と「人間メルヒェン」に分類した場合、前者

では、主人公が最初から森の中に「居る」話が50%を占める。後者は、主人公が森へ「入る」話が圧倒的に多く、約94%を占める。

4. 森が主人公の移動行為に関わる空間としてではなく、「比喩表現」として表れる例が4話、移動行為との重複を含めば11話に上る。

3. 動機と目的

森へ行くという行為を考察するとき、その動機を大きく二種類に分類できる。すなわち、森が目的地として意識されている場合と意識されていない場合の二つである。後者の場合、登場人物（主人公か否かは問題ではない）は自分の行く先には森があることも、自分が森へ入ることになるということも自覚してはいない。ところが前者は、登場人物が自分の進む道がまさに森に通じているということ、換言すれば自分が森を目指していることをはっきり自覚しているのである。ただし、登場人物が森へと行くことを「欲する」のか、それとも行くことを「強えられる」のか（「行かねばならない」もしくは「連れて行かれる」）によって、この意識的な動機を「能動的動機」と「受動的動機」とに分類することができる。能動的動機の代表的なものが、仕事等の日課や、娯楽である。危険回避や課題、試練のために森へ行く場合は、自分自身の決断による場合もちろんあるが、その裏にはそう行動せざるを得ないというやむをえない事情を抱えている場合が多い。また、放置（子どもを捨てる）行為に至っては、加害者と被害者とが存在する。また、旅の途上での森への進入に関しては、意識して森へ入る場合と偶発的な場合とがある。以下、これらの動機を大きく六つの項目に分類し、例証する。

3-1. 日課（仕事、食料調達）

KHM15「ヘンゼルとグレーテル」、KHM3「マリアの子ども」、KHM99「ガラス瓶の中のおばけ」等では、木こりが仕事をするために、すなわち木を切るために森へ行く。つまり職業的な動機であり、森が「仕事場」の役割を果たしている。仕事のために森へ行く人物が主人公である場合もちろんあるが、ここに挙げた三例においては、仕事をするために森へ行く者とは主人公の親である。また木こりだけではなく、粉引き（KHM31「手なし娘」）や農場の下僕（KHM90「若い巨人」）も木材を採取するために森へ行く。また、森は、狩人にとっての狩りをするという仕事場となる（KHM26「赤ずきん」等）。さらに食料調達の目的で森へ行く話は、HM13「森の中の三人の小人」、KHM161「雪白と紅バラ」が代表的であり、その場合は少年ではなく少女がイチゴ、もしくは漿果（草の実）を摘みに森へ行く。これらはその動機からみて、「日課」と呼ぶにふさわしい。

3-2. 娯楽（遊戯、国王の狩り、談話）

「仕事」として森へ行き狩をする狩人とは異なり、王や王子が狩猟目的で森へ行く場合、これは仕事というよりは娯楽と見なすべきである。前者にとっては、日々の糧を稼ぐため

の「狩り」であっても、高貴な身分の后者にとっては趣味やたしなみの一種となり、場合によっては獲物の量が権力誇示の道具になる。身分の低い女主人公の将来の配偶者となるべく森に入る国王や王子は、狩りが目的である場合がほとんどである（KHM3、9、53等）。また KHM1「カエルの王様、または鉄のハインリヒ」では、王女が、金の鞠で遊ぶために森の泉の淵へ行く。KHM69「ヨリンデとヨリンゲル」では、主人公の二人は、二人きりで話をするために森へ行く。この「遊戯」と「談話」行為もまた「娯楽」と見なそう。Aの日課とBの娯楽行為とは、その行為が日々の糧に直接関連しているかどうかで区別される。したがってAの行為は必然的に身分の低い者によって担われ、Bは身分の高い者によって担われる可能性が高い。しかしながら、談話を目的に森へ入る場合だけは、日常空間から離れ、身を隠すことができる場所（森）を談話の場を選択していることから、その行為者の身分に言及することは容易ではない。

3-3. 危険回避（避難）

生命の危険に瀕した人間がその危機的状況から逃避する場として、森が選ばれる。KHM9「十二人兄弟」では十二人の王子が、実父である王の殺意（もし妹が生まれれば十二人全員を殺すという殺人予告）から逃れるために、母親の助言にしたがって森へ入る。KHM11「兄妹」では、殺意の明示こそなされてはならないものの、継母の冷遇と虐待から回避するために子どもたち二人が森へと入る。このような場合に森は「避難所」として機能する。

3-4. 課題（探求）

KHM20「勇ましいちびの仕立屋」で仕立屋は、悪者を退治するために三度森へ行く。最初は悪い巨人、次に大きな害を引き起こしている一角獣、最後に悪い猪を退治する。このような登場人物は、何らかの試みのため自分の意志でその地へ赴く。巨人との力比べのために森へ行くこともある。または誰かを探すという目的で、意図的に森へ行く場合もある。KHM9「十二人兄弟」の、十二人の兄弟の下に生まれた妹は、兄達を探しに森へ行く。このように、自分の意志で何かを追求すべく森に入る場合、その動機を「課題（探求）」と見なそう。

3-5. 勧告、約束、命令

受動的動機のヴァリエーションとして、何者かに森へと連れてこられる場合がある。上述の KHM9「十二人兄弟」の兄弟の森行きは、母親の勧告によるものである。勧告の典型は KHM26「赤ずきん」にある。しかしながらこの場合は、赤ずきんが焼き菓子とワインを森に住む祖母のところへ持っていくという点では、課題の一例と見ることもできる。KHM40「盗賊花婿」では一人の少女が、自分の意志に反して森の中の自分の婿の家へと行く。これは少女以外の者の間で交わされた「約束」であり、少女の立場から考えれば「義務」と見なされる。「命令」の一例は、3-1で挙げた KHM13「森の中の三人の小人」

にも見られる。継娘が寒い冬の森へイチゴを摘みに行く行為の背後には、継母による命令が隠れているからである。KHM88「歌いながら飛び跳ねるヒバリ」では、ある男の末の娘が、森のライオンのところに行くことを余儀なくされる。その男が、自分の帰宅後最初に見たものを差し出すという約束を、森のライオンと交わしていたからである。これもまた、少女以外の者の間で交わされた「約束」であり、少女の立場から言えば「勧告」もしくは「命令」ゆえの森行きと見なしうる。ただしここではその「勧告」もしくは「命令」を、少女が自ら承諾したという点で、完全に「受動的」とは言いきれない。

3-6. 能動的放置（捨てる）と受動的放置（捨てられる）

3-1から3-2までの森へ行く諸動機を、自らの意思によるもの、すなわち「能動的」と見なすなら、自らの意思にはよらない「受動的」動機も存在する。極端に受動的な側面は、子どもを捨てる場合の「捨てられる」事態となって表れる。KHM15「ヘンゼルとグレーテル」では、ひどい物価騰貴のために日々の糧を稼ぎ得なくなった両親により、二人の子どもが森に捨てられる。KHM3「マリアの子」では一人の少女が、木こりである父親に森へと連れて行かれる。その理由とは、森の中で父親と遭遇した聖女マリアが、彼の娘を引き取り育てることを望んだからである。KHM53「白雪姫」で白雪姫は、継母の命令で狩人に森に連れて行かれ、危うく殺害されそうになる。この場合森は、人知れず殺人を犯すことのできる「殺害の場」として機能する。しかしその一方で森は、3-4のように人が逃げ込む「避難所」としても描写される。このように能動的であれ受動的であれ「放置」という行為と関わる森は、生命を奪う場であると同時に、生命を守る場ともなりうる。また、能動的放置の行為者、すなわち子どもを置き去りにする人物は、それが悪い継母であれ、女王の命を受けた狩人であれ、貧しい木こりであれ、身分の差は問題ではない。重要なことは、子どもを捨てるという行為、そして子どもの意思に関係なく行なわれる子どもが捨てられるという事実そのものなのである。

3-7. 道の途上での偶発的進入と意図的進入

世界遍歴の途上で偶然森へ入る場合がある。KHM8「おかしな辻音楽師」、KHM54「背囊と帽子と角笛」、KHM60「二人兄弟」、KHM85「金の子ども」等がこれに当たる。KHM100「悪魔の煤だらけの兄弟分」では、退役兵士が生計を立てる手段に困窮し、結果的に森へ行く。遍歴、旅、探索に出かけた登場人物はこのように歩を進め、森の前、または森の中へと至る場合が多い。その一方で旅の途上における森への進入が、偶発的ではなく意図的に行なわれる場合もある。KHM107「二人の旅人」では、仕立屋と靴屋が、森の通過に要する日数を算出し、それぞれ違う量の食料を携え森へと入る。二人の蓄えた食糧の差が、森の中で二人の間に交わされた非人道的なやり取りを誘発するのであるが、森に入るという行為自体は意図的に行なわれているのである。

上述のように、森へ入る動機には能動的なもの受動的なものがあり、その受動性と

能動性は不即不離の関係にある。すなわち、自発的に森へ入る日課の裏側には、生命の維持のための食料確保という内なる「命令」が潜み、「課題探求」という自発的行為の裏側には、その「課題」を与えられ、「探求」すべき状態に置かれているという意での内なる「必然」が存在する。「危険回避」のために自発的に森へ入る状況の裏には、「危険」状態というやむをえない状況が潜む。その両極性は、「放置」もしくは、道の途上での森への「進入」に顕著に表れる。このように、意図されたものと意図されていないもの、自由意志と命令という一見相反する動機が無数に散りばめられているが、KHMの森へ行くという行為とは、あくまでも森で何かが起こるためのお膳立てにすぎない。すなわち、登場人物にとって森へ行くという行為は、理由はそれぞれ異なるにせよ、いわば「必然」なのである。森という語が出てくれば、そのほとんどの場合において森へ行くという行為、もしくは森に居るという状態が随伴しているのであり、そのための種々様々な動機づけはあくまでも、森へ入る「必然性」を強調するためのものなのである。

4. 樹木（全体像）

森の内部にある「自然の事物^{もの}」のまず代表的なものは植物である。樹木類、灌木類、花を含むこれら植生には、根をつけている状態と、つけていない状態とがある。ここではまず、森の代表的な構成要素である樹木に関する描写に着目する。「樹木」Baumを立ち木状態としてとらえ、その数を総計すると、全210話中51話である。しかしながら本論考の目的は、森の構成要素の検証にある。森の外部に単独で登場する樹木を51話から除外すると、森の中に樹木が登場する話は、計42話となる。また、「木」という集合名詞、あるいは固有名詞で登場する話の分類は、下記のとおりである。数字はKHMの通し番号を示す。

木 (Baum、複数形 Bäume)	3, 5, 9, 11, 15, 17, 20, 27, 37, 48, 54, 59, 60, 62, 64, 65, 68, 69, 71, 75, 88, 90, 91, 107, 108, 111, 113, 121, 122, 123, 127, 128, 136, 138, 142, 146, 157, 161, 169, 179, 193, 199	シラカバの木 (Birke)	60	
		ブナの木 (Buche)	69	
		カシ [ミズナラ] の木 (Eiche)	8, 9, 20, 26, 71, 90, 99, 107, 163, 179	
		ヤマナラシの木 (Espe)	8	
		ハシバミの木 (Haselnußbaum)	8, 26, 210 (Staude)	
		サクラの木 (Kirschbaum)	20	
	リンゴの木 (Apfelbaum)	29 (mit goldenen Äpfeln), 57 (mit Goldenen), 179	菩提樹 (Linde)	1
			モミの木 (Tanne)	166, 193
		ヤナギの木 (Weide)	80	

この他にも、「クルミの木」、「ネズの木」、「ナシの木」が重要な役割を演ずる話もあるのだが、森の構成要素ではないので割愛する。集合名詞である「木」Baum として登場する場合には、固有名詞に付随する個性や先入観のごときものから、むしろ解放されている。²²⁾ この傾向は、KHM の森に地名が付されているものがたった一例しかないということ、さらにそれ以外でも、地名を記している話が極端に少ないということ、すなわち、リューティのいう「単なる名詞の記述」die bloße Benennung、もしくは「最小限の名詞の記述」die knappe Benennung と同じ方向性にある。²³⁾ 樹木の匿名性が増せば、読者の想像が容易となる一方、その名詞を修飾する形容詞の存在が大きくなる。樹木類に付された形容詞もしくは属性を挙げると、下図のようになる（樹木の固有名詞に付された形容詞も含む）。

alt (古い)	1, 3, 8, 64, 69	mit Bienennest, Honig (ミツ)	62
ausgerissen (引き抜かれた)	20, 107, 161, 199	バチの巣、ハチミツを伴う)	
hohl (洞のある、空洞の)	3, 8, 11, 65, 68	mit Vogelnest (鳥の巣を伴う)	68, 129
groß (大きな)	51, 96, 99, 123, 129, 161, 163	mit Vogel (鳥を伴う)	88, 96, 110, 122, 123, 161, 185
mächtig (がっしりとした、巨大な)	20	bis an den Himmel gewachsen (天に届くまで成長した)	112
hoch (高い)	8, 9, 54, 111, 163	Baumgang (並木道)	133
gefährlich (危険な)	99	etwas darin (何かを内含する)	138
klein (小さな)	127	den Mond daran befestigt (月を固定した)	175
voll schöner Früchte (美しい実がたわわに実った)	23, 31, 91, 121, 158, 195		

「大きな木」、「高木」は見張り台、展望台の役割、森の中の目印の役割を演じることが多い。また「巨大な木」ともなれば、力試しに使用されることもある。「空洞の木」は一晚の宿を提供したり、その中に不思議な贈り物が詰まっていたりする。「古木」の周辺、とりわけ「古木」の「根元」には、不思議な贈り物や不思議な生物が発見されることが多い。「たわわに実った木」には、自然の恵み豊かな側面が表現されており、また、「鳥の止まった木」もしくは「鳥」と「木」の相関性は、自然の穏やかな風景を表すとともに、「古木」の「根元」と同様、不思議な贈り物と関係している場合が多い。²⁴⁾

5. 木 (部分像)

樹木が立ち木の状態で登場し、物語の進行に関与する場合もあれば、木の部位が詳細に記される場合もある。そのときは、各部分の特性あるいは用途に、焦点が当てられている場合が多い。以下、木の各部位についての細部描写を確認する。

5-1. 木材 (Holz)

森における木が、単に伐採される目的で登場するとき、BaumではなくHolzが使われる場合が多い。そのようにHolzが登場する話は、KHM3、9、15、23、31、37、46、64、90、99、106、127、128、183の14話である。KHM9「十二人兄弟」では、目的が「料理用」zum Kochenと明示されており、KHM127「鉄のストーブ」では、「小さな薪の山」ein kleines Häufchen Holzと記されているため、いずれも「用材」としての「木」であることが明白である。KHM37「親指小僧」では、「木を伐採することができる場所」Platz, wo das Holz gehauen wardという記述から、Holzが「立ち木」ではあるものの「木材」としての意味合いであることがわかる。また、KHM106「貧しい粉屋の若者と子ネコ」では、「銀でできた建材木」Bauholz von Silverという特殊な木材が登場する。上記14話中のKHM23とKHM90、さらに14話外からもKHM165とKHM166の合計4話では、Holzが「木」や「木材」ではなく、その集合体である森という意味で、場合によってはWaldと交互に登場する。しかしながらこれは、北ドイツ方言でHolzがWaldを指すことから容易に理解しうる。

5-2. 葉 (Laub / Blatt)

「葉」Laubという語は、KHM11、48、75、107、179の5話に登場する。「葉 (葉々)」Blatt (Blätter) は、KHM47 (方言)、53、102、107、122の5話に登場する。どちらも葉を示す語であるが、Blattの場合、「木の葉で笛を吹いた」auf dem Blatt piffという形で、立ち木からすでに離れた状態の「葉」をも示すことが特徴的である (KHM107、122)。また、KHM102「ミソサザイとクマ」のように、木に止まった鳥の声に人が耳を澄ますときに、「合言葉が外に漏れてくる一枚の木の葉の下」unter ein Blatt auf den Baum, wo die Parole ausgegeben wurdeと、一枚の葉を厳密に差す場合もあれば、KHM53「白雪姫」のように、「木々の葉という葉すべて」alle Blätter an den Bäumenと、木に生えている葉全体を指す場合もある。

Blattが散文的ないしは物質的表現であるのに対し、Laubは (後述のAst等と共に)、叙情的もしくは比喩表現の中で頻出する。KHM107「二人の旅人」とKHM179「泉のほとりのガチョウ番娘」には次のような描写がある。

森の中は教会内部のように静まり返っていた。風はそよがず、小川はざわめかず、鳥は歌わなかった。そして葉の密に茂った枝 (die dichtbelaubten Äste) が日の光をとおさなかった。²⁵⁾

太陽は明るく輝いていた、鳥は歌い、涼しげな空気が木の葉の間を (durch das Laub) 駆け抜けた。そして彼は歓喜に満ち溢れていた。²⁶⁾

「太陽の光」が差し込まないほど鬱蒼とした森の状態、または「空気」が駆け抜けた状態

が、「葉」Laubによって表現されている。前者において、光を通さないほどに密に茂った木の葉の表現には、森の静寂と閉鎖性とうかがえる。また、心地よい空気の流れ、すなわちそよぐ風が、揺れる木の葉によって巧みに表現されているのである。

5-3. 枝 (Ast / Zweig)

森の中の木の「枝」はKHM27、47、60、99、107に登場する。その中で、KHM99「ガラス瓶の中のおばけ」には「緑の小枝」die grünen Zweige、KHM47「ネズの木」には「木々すべてに緑の小枝」alle Bäume (mit) grünen Twygeという表現である。いずれも「緑の」という形容詞が付されており、「枝」に「葉」が茂っている状態が前提となっている。また、KHM60「二人兄弟」では、鳥の巣のある場所を表現する際に、「いくつかの枝」ein paar Ästeと記されている。

5-4. 幹 (Stamm)

「幹」Stammが登場する場面は二箇所しかない。まずKHM199「水牛革の長靴」では、森の中の「切り倒された木の幹の上に」auf einem abgehauenen Baumstamm、緑色の狩衣の男がピカピカの靴をはいて座っている。しかしながら「幹」に関わる描写でも、KHM69「ヨリンデとヨリンゲル」では以下のごとくである。

美しい夕べであった。太陽は木々の幹の間から森の深緑の中へと明るく差し込んでいた。²⁷⁾

「葉」の場合と同様に、太陽の光に関する記述に樹木の部位がここでも使われている。しかしながらKHM107「二人の旅人」における、太陽の光を通さないための「葉の密に茂った枝」ではなく、KHM69では、太陽が「木々の幹の間から」zwischen den Stämmen der Bäume 差し込み、「森の暗い緑」das dunkle Grün des Waldesを「明るく」hell 照らし出しているのである。夕べであるという状況から、垂直ではなく水平に近い角度で差し込んでくる陽光が容易に想定される。その夕べの美しさと陽光が横から差し込んでくる様子が、「幹」という語を用いた木漏れ日の比喩表現によって際立っているように思われる。

5-5. 根 (Wurzel)

「木の根」WurzelはKHM11、12、64、99、161の5話に登場する。KHM11、12において「木の根」は、森をさまよう登場人物の食料となるのに対し、KHM64、99、161では「木の根」が、不思議なものや宝を発見する場所に深く関わっている。KHM64「金のガチョウ」では、「木の根の中で」in den Wurzeln 金のガチョウが発見され、KHM99「ガラス瓶の中のおばけ」では、「木の根もとの小さな穴の中で」bei den Wurzeln, in einer kleinen Höhlung メルクリウスの入ったガラス瓶が発見される。さらにKHM161「雪白の紅バラ」では、「木の根と木の間で」zwischen den Wurzeln und Baums、金のつまった袋が発見さ

れる。これらの発見はいずれも、その後の主人公の運命に深く関わる出来事となる。

6. 灌木、花、漿果、堅果等

樹木ばかりでなく、低灌木や木の実、薪もまた、森の重要な構成要素である。以下、樹木以外の植生に言及する。

6-1. 漿果 (Beere) — イチゴ (Erdbeere) を含む

「漿果」Beere もしくは「イチゴ」Erdbeere が登場する話は、KHM11、12、13、15、161、210の6話である。特にKHM13「森の中の三人の小人」では「イチゴ」Erdbeere、KHM161「雪白と紅バラ」では「赤い漿果」rote Beeren、KHM210「ハシバミの杖」では「最も美しいイチゴ」den schönsten Erdbeeren が登場する。「漿果」は、森をさまよう登場人物の食料となることが非常に多い。また「漿果」の採取は、特に少女が森へ行く理由となる。

6-2. 堅果 (Nuss) — ハシバミ (Haselnuss) を含む

森の中ではKHM8、11、26、127にいずれも「堅果」Nußが登場する。KHM26「赤ずきん」では「クルミの生垣」darunter die Nußhecken という状態で、またKHM8「おかしな辻音楽師」では「小さなハシバミの木」ein Haselnußbäumchen というかたちで登場する。それ以外では、木全体としてではなく「実」として登場する。KHM127「鉄のストープ」では、森で獲得された三つのクルミの実の中に、豪華な衣装が隠されている。²⁸⁾

6-3. 草、薬草 (Kraut/Kräuter)

KHM9、11、44の森には、「草」という意味のKraut、もしくは複数形で「薬草」Kräuter が登場する。²⁹⁾ KHM9「十二人兄弟」では、森に「サラダ用の草 (薬草)」Kräuter zum Gemüs が生えている。KHM11「兄妹」における森の「草 (薬草)」Kräuter も食料となる。この2話においてKrautは複数形で登場するので、単なる「草」とも「薬草」とも見なしうる。しかしKHM44「死神の名付け親」では、死神が主人公に贈る物は、森に生える単なる「草」ein Krautであるが、この草が、どんな病をも治療する「万能薬」となり、主人公を名医にする。常識では特別な価値を有さないはずの単なる「草」が、ここでは死神の不思議な力により、薬草の中の薬草として機能するのである。

6-4. 茨 (Dorn / Dörnchen)

KHM12、13、53、166の森には「茨」Dorn (Dörnchen) が登場する。KHM12「ラプンツェル」では、ラプンツェルが幽閉されている森の高い塔から魔女よって突き落とされた王子の目に「茨 (の棘)」die Dornen が刺さり、王子は盲目となる。³⁰⁾ KHM13、53、166の森にも「藪や茨だらけ」voll Dörner und Gebüsch、もしくはそれによく似た表現があり、

森をさまよう場合の困難を強調している。³¹⁾

6-5. 茂み (Busch / Gebüsch)

森の中に「茂み」Busch/Gebüschが登場するのは、KHM11、93、128、166、193の5話である。KHM11「兄妹」ではシカの姿になった兄が、国王の狩りの一行から「茂みを飛び越えて」über das Gebüsch 逃げる。KHM166「強力ハンス」では、森の奥へと入り込んだ母親と幼子の前に、「茂みから」aus dem Gebüsch 突然二人の泥棒が飛び出してきて、親子を拉致する。「茂み」は、自分自身もしくは自分以外の者が身を隠す場所によく利用される。

6-6. 灌木、藪 (Strauch / Staude)

「灌木」もしくは「藪」と訳される Strauch も、KHMの森にはよく登場する。KHM8「おかしな辻音楽師」では森の中に、「両脇に高い灌木のある散歩道」auf einen Fußweg, zu dessen beiden Seiten hohe Sträucher standenが続いている。KHM53「白雪姫」では、ガラスの棺を担いだ家来の一人が、「ある藪に」über einen Strauch つまづいたその拍子に、毒リンゴのかけらが白雪姫の喉から飛び出し、彼女は蘇生することとなる。KHM69「ヨリンデとヨリンゲル」では、森の「藪の中」in einen Strauch から、フクロウに姿を変えた魔女が飛び立つ。Strauchは「茂み」Buschと同様に身を隠す場となるとともに、歩行を妨げる「障害」となり、それが結果的には白雪姫の「蘇生」のきっかけとなる。

「灌木」という意味では、Staude という語も KHM166と KHM210に登場する。³²⁾ KHM210「ハシバミの杖」では、キリストの母親が森の中で、毒ヘビから身を守るために「ハシバミの灌木の背後」hinter eine Haselstaude に隠れ、難を逃れる。ハシバミもしくはハシバミの杖が、毒ヘビ除けの護身具となった所以が記されているのである。また上述の KHM166「強力ハンス」では、泥棒に拉致された親子の次のような描写がある。

二人が灌木や茨の茂みをかき分け (durch Stauden und Dörner)、二時間近く懸命に歩き続けた後、扉の形をした岩の所へたどり着いた。³³⁾

「茨」と同様「灌木」Staudeも、何かをなす場合、あるいは歩き続ける際の「障害」として、ここでは二時間もさまよい続けることの過酷さを強調しているのである。

6-7. 花 (Blume)

「花」Blumeは、固有名詞で登場する場合もある。KHM9「十二人兄弟」では、兄弟と末の妹が共同生活を送る森の家の庭に、十二本の「ユリの花」Lilienblumenが咲いている。その「十二本の白い花」die zwölf weißen Blumenを彼女が手折るや否や、十二人の兄弟がカラスに変身するのである。花が、生命の象徴もしくは兄弟の化身として作用している例である。KHM49「六羽のハクチョウ」では、継母の魔法でハクチョウの姿に変えられ

た六人の兄たちを助けるために、妹が森の中で、口もきかず笑いもせず、「星の花」 Sternblumen で六つの小さなシャツを縫う。KHM26「赤ずきん」で赤ずきんは、森の中で辺り一面に咲いている「美しい花」 die schönen Blumen を摘むようオオカミにそそのかされ、それが道草のきっかけとなる。また、KHM179「泉のほとりのガチョウ番娘」では以下の描写がある。

空気は生ぬるく柔らかかった。周りは緑の草地が広がり、サクラ草 (Himmelschlüsseln)、野生のジャコウ草 (wildem Thymian) や他にも幾千もの花々 (andern Blumen) が散りばめられている。草地の真ん中には透き通った小川が流れ、その上には太陽が輝き、白いガチョウがあちこち歩きまわったり川で水浴びをしていた。³⁴⁾

森の穏やかな自然風景が、サクラ草、ジャコウ草といった花々を通して詩的に表現されている箇所である。さらに KHM166「強力ハンス」は次の描写がある。

〔ハンスと母親の〕二人は岩屋を立ち去った。ところが、暗闇の中から日の当たる場所へ出て、緑の森 (den grünen Wald) を、花、鳥、そして空に輝く朝日 (Blumen und Vögel und die Morgensonne am Himmel) を目にしたことは、ハンスにとっては大きな驚きとなった。³⁵⁾

花の咲く明るいこの森は、「緑の」 grün という形容詞が付されている唯一の森である。森の暗い側面ではなく、緑に彩られ、花や鳥の囀りに満ち、朝日に輝く、明るくポジティブな森の自然がここに表現されている。³⁶⁾

6-8. コケ (Moos)

「コケ」 Moos も、森には多く存在する。KHM11、57、62、161、163の5話がその例である。「柔らかいコケの上」 auf weiches Moos というように、コケは寝床 (ベッド) としてよく登場する。KHM62「ミツバチの女王」では「コケの下」 unter dem Moos、KHM161「雪白と紅バラ」では「コケの上」 auf dem Moos で主人公は眠る。また KHM163「ガラスの棺」でも、「柔らかいコケ」 auf dem weichen Moose が寝床となる。

6-9. 草地 (Wiese)

森の中の「草地」 Wiese は、KHM36、106、163、179、193の5話に描かれている。上述の KHM179「泉のほとりのガチョウ番娘」では、主人公が入った森の中に、サクラ草などの花が散りばめられた「緑の草地」 grüne Wiese が広がり、小川が流れ、白いガチョウが水浴びをしている風景が描写される。また、KHM106「貧しい粉屋の若者と小ネコ」では、森の中のネコの城で主人公に課される第二の課題が、「銀の鎌で草を刈る」ことである。放牧という生活形態が、「草地」を通して読み取れる箇所である。

森の中の草地ではないが、Wiese という語は Wald との組み合わせで頻出する。KHM163「ガラスの棺」では、仕立屋が、森の中の家に泊まった夜に、大きく黒い牡ウシと見事な角を持った牡ジカとの戦いを目撃する。勝利したシカが仕立屋をめがけて突進し、彼を自分の角で串刺しにして持ち上げる。

彼 [牡ジカ] は、道に何があろうが気にかけず、切り株や石を越え (über Stock und Stein)、山や谷を越え (Berg und Tal)、草地や森を越えて (Wiese und Wald) 駆け抜けた。³⁷⁾

この「草地や森を越えて」という表現は、「切り株や石を越えて」という表現同様、頭韻を踏んでいる慣用表現もしくは比喩表現の一種と見なしうる。頭韻こそ踏んではないが二番目の「山や谷を越えて」という部分も含めこれらの表現は、「果てしない遠方」を、歩く距離の長さで表現するときによく用いられる。同様の表現は、KHM36「テーブルよ食事の支度、金貨を生むロバ、棍棒よ袋から出ろ」にも見られる。ひとりで食事の支度をする不思議な木のテーブルを親方からもらった職人の遍歴過程が、以下のように描写されている。

この職人は気分しだいで、野でも森でも草地でも (im Felde, im Wald, auf einer Wiese)、どこでも好きなところを選んだ。背中からテーブルを下ろすとそれを自分の前に置き、「食事の支度を！」と言った。すると、ほしいものが何でも出てきた。³⁸⁾

諸国漫遊の旅の行程が、「野でも森でも草地でも」と叙情的に表現されている箇所である。Feld と Wald は、複数形 Felder と Wälder で脚韻を構成し、Wald と Wiese は、KHM163同様に頭韻を踏んでいる。これらとよく似たの比喩表現が、古いドイツの法律古事にも見られる。

6-10. 草 (Gras)

「草地」Wiese には「草」Gras が生えている。「草」は、KHM11、106、179、210、127 の5話に登場する。KHM11「兄妹」では、「柔らかい草」zartes Gras が、シカに姿を変えられた兄の食料となる。上述の KHM127「鉄のストーブ」でも、「まわりに草がたくさん生え」viel Gras darum gewachsen、「前には薪の山」ein kleines Häufchen Holz davor が積まれた森の中の一軒屋が登場する。いずれも、「草」の飼料としての目的が暗示されているのに対し、KHM210「ハシバミの杖」では、「草」の中が毒ヘビの潜む場所となっている。

6-11. その他

上述した森の植生の他にも、たとえば「シバ」Reisig が、KHM15「ヘンゼルとグレー

テル」とKHM90「若い巨人」に登場する。これは「木」Holz 同様、森で採取される燃料の一つである。また、「ワラ」Binse が、KHM11「兄妹」に登場し、妹が、シカの姿となった兄をつなぐ縄を編む材料となる。KHM163「ガラスの棺」では、「アシとイグサでできた小さな家」ein kleines Häuschen aus Rohr und Binsen が登場する。いずれも、素材そのものは自然のものではあるが、それぞれに手を加えて別のものを形成しているため、本論考では列挙に留める。

7. 泉あるいは井戸（Brunnen）

KHM の森において、樹木について大きな役割を担っている場所が、Brunnen である。この語は「泉」、場合によっては「井戸」にも対応する。

KHM1「カエルの王様もしくは鉄のハインリヒ」において、王の居城近くに存在する森は大きく暗い。そしてその森の中には「菩提樹の古木」が茂り、その下に、後に王女が将来の結婚相手と出会うこととなる「涼やかな泉」がある。この泉に住むカエルは、あらかじめ魔女によって「魔法をかけられた者」であり、最終的には魔法が解かれ、主人公の結婚相手となる。森には魔法をかけられた者が多く存在し、さまざまな形象を取って現れるが、このカエルもそのヴァリエーションの一つである。つまり、泉（井戸）は、森と「魔法をかけられた者」との出会いに関与しているのである。

もうひとつの例は KHM179「泉のほとりのガチョウ番娘」である。主人公である若い伯爵が、森で老女と下女とガチョウの住む家を発見し、いったん森を出る。たどり着いた王の居城で「真珠の涙を流す三番目の王女」の話聞き、彼は再び森へと戻る。森の泉のほとりで、先のガチョウ番の下女が老婆の皮を脱ぎ捨てる現場を、伯爵が木の上から目撃する。この女が三番目の王女であり、最終的には主人公の結婚相手となる。この場合、「魔法をかけられた者」は、泉の水の中に住むものではないが、「超自然的現象」としての魔法と森の泉との関わり方の一例と見なしても差し支えないであろう。

森の中に湧き出でる泉の描写は、KHM11「兄妹」にも存在する。兄は、喉の渇きを癒すために泉の水を飲む。泉は人間の生命維持に大切な役割を果たしている。しかしながらこの森の複数の泉には魔女の魔法がかかっており、その水を飲んだものをそれぞれトラ、オオカミ、シカに変えてしまう。この話においても、泉と「魔法をかけられた者」との関わりを見ることができる。泉の水を飲み、シカに姿を変えられた兄の導きで妹は、結婚相手となる王に出会う。「魔法にかけられる」もしくは「魔法にかけられた状態にある」ということが、KHM1、179と同じように KHM11においても、後の運命を左右する重要な契機となることは明白である。つまり森の泉は、運命をつかさどる機能を担うといえる。

KHM136「鉄のハンス」では、森の中に山男の住む沼がある。後々「鉄のハンス」と呼ばれる山男が、狩人によって王の居城に連れてこられ、八歳になる王子によって逃げるきっかけを与えられ、王子を連れて森へ逃げ込む。森には金の泉があり、水に触れたものを金色に変えてしまう。王子には、金の泉に何物をも落としてはならない、またそれを監視せ

ねばならないという試練が課せられる。しかし彼は、自分の指や髪を泉に浸してしまった結果、旅という試練をさらに課せられる。泉をめぐる禁則のモチーフは、KHM11の飲んではならない泉の水と同様、結果的には破られることとなる。しかしながらそのような結果も含め、森の泉は、それから先の話の展開と主人公の運命を左右する重要な要素である。この鉄のハンスは、最後まで王子の助言者の役割を演じる。その助言にしたがって試練を克服した王子は、最終的に結婚相手を得るのである。

KHM116「青い灯り」³⁹⁾では、主人公の退役兵士が、森の中の魔女の住む家にたどり着く。そこで強いられる労働（試練）の一つに、「家の裏の古井戸から青い灯りを取ってくる」というものがある。実際その古井戸の中で見つかった青い灯りで、彼がパイプに火をつけると、煙の中から黒い小人が出現し、その小人の助けにより、後に降りかかる困難を克服することとなる。まず、森の魔女の住まう家というだけでも不可思議で超自然的な印象を与えるが、その魔女の家の裏にある井戸は、一層不可思議な空間へと通じている。井戸の底には灯りが隠されており、主人公の助言者となる不思議な小人の出現に寄与する。森の井戸の中が、不思議な力の源となる超自然的なものの存在しうる空間であることがわかる。⁴⁰⁾

生命の維持のために水は欠かせない。また樹木が生育する場において水は不可欠であり、その水を用意しうる泉や沼が、無数の木々に覆われた森に存在することになら不思議はない。泉は、森の自然の滋養豊かな側面を表す重要な要素となる。井戸もまた、地下から湧き出るといふ意味では泉と同じであり、森という自然の一部をなす。泉もしくは井戸は、不思議な世界である異界への入口となり、不思議な作用を及ぼしたり、不思議な道具を用意したりする。また、「魔法にかけられる」という現象に深く結びつく場となる。さらに泉は、主人公の運命を決定する重要な契機ともなるのである。

8. 石 (Stein) と岩 (Felsen)

「石」Stein もまた、森の一構成要素である。KHM163に見られる「切り株や石を越え」über Stock und Stein という表現は、森との関連で出てくるわけではいが、「草を分け岩を越え」、「がむしゃらに」、つまり難関や障害の克服を意味する慣用表現と見なしうる。KHM53「白雪姫」には、まさに森の中の描写として次のような箇所がある。

かわいそうなその子 [白雪姫] は、そうして大きな森の中で一人きりになった。不安がつりの、木々の葉という葉すべて (alle Blätter an den Bäumen) を見やったが、どうしていいか見当もつかないほどだった。するとその子は歩き出した。とがった石を踏み越え (über die spitzen Steine)、茨の茂みをぬけて (durch die Dornen) 歩いた。野獣 (die wilden Tiere) がその子の側を駆け抜けはしたが、危害は及ばなかった。⁴¹⁾

ここでは、踏み越えるべき石はとがっており、通り抜けるべき茨にはとげがある。森をさ

まよう「過酷さ」が強調される比喩表現である。この他にも森の中に「石」は登場するが、それは「宝石」Edelsteinであったり（KHM15、123）、森の家の素材であったりする。KHM193では「古い石の家」ein altes steinernes Haus、KHM199では「石の家」ein Steinhausが登場している。また、KHM125「悪魔とその祖母」では、森の岩屋の「地下室の上に大きな石」einen großen Stein über einem Kellerが置いてある。主人公である三人の兵士の一人がこの石の陰に潜み、悪魔から助言を聞きだすのである。また、KHM106「貧しい粉屋の若者と小ネコ」では、「金の砥石」einen Wetzstein von Goldという不思議な道具が登場する。

「石」と同様「岩」Felsenもまた、森の中には登場する。先に挙げたKHM125「悪魔とその祖母」で兵士は、森の中の「あたかも小屋のように見える、崩れ落ちた岩壁のところ」に an eine eingestürzte Felsenwand [kommen], die aussieht wie ein Häuschen⁴²⁾ にたどり着く。そこには、「石のように年をとった一人の老婆」eine steinalte Frauが住んでいるが、彼女こそ、彼に助言を与えてくれる悪魔の祖母なのである。KHM (KL) 202「十二使徒」では、十二人兄弟の長男ペトルスが森に入り、「岩の間の大きな穴へ」zu einer großen Höhle zwischen Felsenとやってくる。その中では、「すべてが金と銀と水晶で輝いている」blitzte alle von Gold, Silber und Kristall。他の十一人も相次いでここに到着し、十二人は金のゆりかごの中で三百年の眠りにつく。KHM166「強力ハンス」では、森の中で育ったハンスが、別の森に入る。彼が「ある巨大な岩の所に」zu einem mächtigen Felsen⁴³⁾ やってくると、その前には巨人が、大きなごぶしを振りかざして岩を割っている。彼が小人を追いかけてまた別の森に入ると、今度はその小人が「ある岩穴の中へ」in eine Felsenhöhle⁴⁴⁾ 入り込むのを目撃する。「石」とは異なり「岩」は、隠れ家のような役割をするとともに、不思議な存在が身を隠す場所、したがって、主人公がその不思議な存在と出会う場所として機能する。この「岩屋」は、別稿で森の中の「人工的につくられたもの」のカテゴリーに分類される、「家」と同じ機能を果たしていると考えられる。

おわりに

森を構成する「自然の事物^{もの}」として、樹木をはじめとする様々な植生から泉、石や岩に至るまで、それがどのような特性を有し、作中人物にいかに作用し、物語の中でいかに機能しているかに注視しながらKHM第七版を概観してきた。最初の段階では「単なる名詞の記述」という形でのみ登場した森の外観も、内部に入れば大変多彩で深い意味を帯びていることが判明した。しかも、森が暗く深いということだけではなく、その明るい面も記されており⁴⁵⁾、主人公がそこをさまよう場合の不安感や困難が森の「暗い」側面に、そして彼らの歓喜が森の「明」の側面に投影されていることが、詳細な観察からも推測される。KHMの登場人物はリュウティの言うように、「心情」や「感情」をあまり持ち合わせてはおらず、その性格は外見に投影され、端的に表現されていることも確かである。しかしながらテキストの中で、森をさまよう艱難辛苦や孤独感の表現が、茨やとがった石、森内

部の暗闇と作中人物との関わりによって強調され、森の自然の豊かさや滋養に満ちた側面が、漿果、堅果、色とりどりの花々、小鳥のさえずりによって助長されていることに疑いの余地はない。

ヴィルヘルム・グリムは、「メルヒェンの本質について」の中で、メルヒェンを、そしてメルヒェンの森を以下のごとく捉える。

また、まるで黄金時代のようにすべてがまだ命をもっている。太陽、月、星は近い存在で贈り物をくれる。山では小人が鉱石を求めて働き、水の中には水の精が眠っている。獣も鳥（ハトが最も愛される人の役に立っている）も植物も石も言葉を話し、思いやりの気持ちを表現するすべを知っている。〔中略〕あらゆる自然が共に生きていること、最大のもつと最小のもつとが無邪気に信じ合うことは、言い尽くせない魅力をその中に秘めている。⁴⁶⁾

主人公を含めた登場人物の「心情」を外的自然へ、とりわけ森の自然への投影をグリム兄弟が試みたと仮定すると、そのような心情の自然への投影が可能となるのは、自然が人間による被支配物であるという世界観以外に、人間と自然とがメルヒェンにおいては共生しうるといふ意における、両者間に結ばれた素朴な絆の残滓を彼らが認めていたからではないだろうか。この素朴な絆は、「異教信仰の痕跡」とも言い換えられるものであるが、グリム兄弟の試みとその背景に関しては、改編加筆のプロセスを詳細に検討した上で改めて結論付けられねばならない。しかし、少なくとも KHM 第七版の森の機能について、あるいは森の構成要素、とりわけ「自然の事物」と作中人物との関わりについて、本論で分析し考察した限りにおいて、登場人物の「心情」が、森の風景、森の「自然の事物」に投影され、そしてそれゆえ一層豊かに表現されていることは、否定しえない事実である。

〔補遺〕 補足資料「森の樹木が果たす五つの役割」

①宿り、避難所

森に入った主人公は、夜になると「木の洞」の中で一夜を過ごすことが多い。たとえば KHM11 「兄妹」に以下のような描写がある。

日が暮れると二人はとある大きな森へとやってきた。心痛ゆえ、また長いこと歩いたため空腹になり疲れたので、ある木の洞に入り込みそこで寝た。⁴⁷⁾

魔女である継母の虐待から逃れ、森に入った二人の兄妹の最初の宿りは、「家」ではなく「木の洞」すなわち「空洞の木」であった。また、KHM65 「千枚皮」にも「木の洞」が登場する。

彼女は運を天にまかせて家を去り夜通し歩いた末に、とある大きな森へと入り込んだ。余りにも疲れていたのである木の洞の中に座り込み、そこで寝た。⁴⁸⁾

実の父親との婚礼を強いられた家を出た千枚皮は、森の木の洞の中で一夜を過ごし、同じ森で狩りをしていた王により、彼の城へと連れていかれる。一端森の中に入ると、その中をさまよう場合が非常に多く、その行程が反対に森の広大さを強調する。一日中歩き回った挙句に日が暮れて、野獣やその他の外敵から身を守り安眠しうる場所を、ようやく木の洞の中に見いだす主人公にとって、そこは「安息の場」であり「寝所」となる。この仮の宿はまた、木の中だけではなく、木の下で提供される場合も多い。KHM107「二人の旅人」において、二人の旅人は森に入り、「三日目は、空腹のまま木の下に横たわり、次の朝、空腹のまま起きあがった。」⁴⁹⁾ また、KHM15「ヘンゼルとグレーテル」でも二人の兄妹は、森を散々歩いた挙句、ある木の下で横になるのである。⁵⁰⁾ 樹木はこのように、洞のある木では洞の中、それ以外では木の下が、一夜を明かす「仮の宿」としての機能を果たしているのである。

②展望台、見張り台

木によじ登り見張りをする、辺りを見渡すという行為も、森に入った主人公がよく行う行為である。たとえば、KHM9「十二人兄弟」では国王が、妻に女の子が誕生すれば、上の十二人の王子たちを全員殺す意志を表明したために、その十二人が母親の助言により森へと逃げ込む。遙か遠くにある故郷の城には、誕生した子が女兒であるか男児であるかを知らせる旗が掲げられることになっている。自分たちの運命を決定するその旗を見るために彼らは、森の中の「最も高いカシ [ミズナラ] の木」に登るのである。⁵¹⁾ KHM54「背囊と帽子と角笛」の三人兄弟の末っ子は、「果てしない森」に入った後、「森のはずれが見渡せるかもしれないという期待を胸に、高い木に登る」⁵²⁾。しかしながらそこで彼が目にしたものは、見渡す限りの木々の梢であり、それ以外は何もなかった。KHM111「上手な狩人」では、主人公が野獣を避けるために木に登る。この点では、「安息の場」もしくは「避難所」としての樹木の機能が当てはまる。しかしながらその後彼は登った木の上から、ちらちらと小さな明かりがゆれるのを見つuckerこととなる。⁵³⁾ このように、KHMの主人公は木に登って周辺を展望し、多くは遠方に「小さな灯り」を見だし、その灯りを目指してさらに森の奥深くへと歩き進むのである。

③不思議な物の発見

先に挙げた KHM54「背囊と帽子と角笛」の末っ子が木から降りてみると、木の下にはご馳走の用意がされ、テーブルクロスの施された食卓が置いてある。⁵⁴⁾ このテーブルクロスは、呪文を唱えればひとりでに食事の用意をしてくれる不思議なテーブルクロスなのである。KHM99「ガラス瓶の中のおばけ」では、木こりである父親の仕事について森に入った学生が、「ゆうに樹齢数百年を越える大きく危険なカシ [ミズナラ] の木 (einer großen,

gefährlichen Eiche)の根元の小さな穴の中」に、メルクリウスの入ったガラス瓶を発見する。また KHM123 「森の中の老女」では、盗賊の襲撃から逃げ出した少女がある木の下に座りこむ。その木の幹には錠前がついており、一羽の白い小バトが加えてきた小さな金の鍵で錠前を開けると、最初の木の中には食事が用意され、二番目の木の中にはベッドが用意され、さらに別の木の中には衣装が用意されているのである。⁵⁵⁾ ここで、不思議な贈り物が主人公に贈られる状況設定に、樹木の存在が関係していることがわかる。⁵⁶⁾ また木の中に用意されたベッドは、先に述べた「仮の宿」としての木の洞と重なる。「宿」、「食料」、「衣装」すなわち衣食住の一切を提供する森の樹木は、KHM では上記のように非常に想像力豊かに描写されているが、その根底には、かつての人間の生のほとんどが森の樹木に依存していたという、森と人間の物理的関わりと、自然の恵みを樹木に、そして森に宿る不思議な力、神に感謝していたという精神的関わりの両方が現れているように思われる。信仰に代表されるといっても過言ではない、森と人間との関わりの中の精神的側面を垣間見させる樹木は、KHM138 「ずんぐりやっこの三人息子」にも表れている。

森には [中略] 恐ろしく大きな木が一本あった。その木の中には、恐ろしく大きな礼拝堂があって、その中には白ブナの下男とツゲの祭司がおり、この二人が聖水を丸太にかけた。⁵⁷⁾

木の洞の中に礼拝堂が存在している。グリム兄弟の『注釈書』では、この話はホラ話となっているが、このような表象が生まれるということそれ自体に、樹木と信仰との関連性を見ることもできるのではないだろうか。先に挙げた KHM99 「ガラス瓶の中のおばけ」でも、主人公は、「五人ではかかえきれないほど大きな樹齢数百年カシ [ミズナラ] の木」を見つけ、「その中に何かが入っているに違いない」と考える。⁵⁸⁾ まず、大きな木の中に何かが入っているに違いないと考えるところに、樹木に付随する特別の価値観が見て取れる。そして木の中ではなく木の根元ではあるが、主人公は実際、不思議な存在に遭遇するのである。

④不思議な存在との出会い

「木を切る」⁵⁹⁾ という行為は森へ行く動機の代表的なものであるが、この行為の際に、不思議なもの、異質なものと接触が起こる場合が非常に多い。たとえば、KHM3 「マリアの子」では、木を切ると乙女マリアが現れる。⁶⁰⁾ KHM64 「金のガチョウ」では、三人兄弟の三番目が木を切りに入った森で灰色の小人に遭遇し、小人の助言どおりにある古木を切り倒すと、そこで金の羽をもつガチョウを発見する。⁶¹⁾ KHM60 「二人兄弟」では、木を切ることはしないのだが、兄弟が相前後して、森の中の木の上に座っている老女を発見する。弟はその老女すなわち魔女に石にされ、兄が同じ魔女から術を解く方法を聞き出し、弟を救出する。⁶²⁾ 樹木との関わりが、ここでも魔女という奇妙で異質な存在との出会い、さらに「石への変身」という現象を媒介している。このように、木の中に入る、登る、

その下に座る、そして木を切るという行為は、何らかの超自然的な存在に遭遇する、不思議な贈り物が施されという、物語の次の段階への橋渡しとして、重要な役割を演じているのである。

⑤変身

上述のように KHM60「二人兄弟」では、木の上に座った魔女が、弟を石の姿に「変身」させる。変身させるという行為と魔女との関係が密なのか、それとも変身という現象と樹木との関係が密なのかを考えると、前者の方が密接に関わり合っていると考えられがちである。実際に魔女によって変身させられた事物や動物は、KHM には非常に多く存在する。KHM123「森の中の老女」で不思議な贈り物を与える樹木も、実際は魔女によって木に姿を変えられていた男性であり、主人公の将来の結婚相手である。ここで、変身をさせたその行為者は確かに魔女である。しかしながら人間という生物が石もしくは木の姿をとるといふ話の背景にはむしろ、石や木を人間の化身と見なす、もしくはそこに人間の生と同じような生命を見るところという考え方が潜んでいるようにも思われる。⁶³⁾

注

- 1) 本論考は、2004年1月に作成した博士論文「グリム兄弟における理念としての森」（九州大学大学院提出）の一部に加筆訂正を施したものである。グリム・メルヒェンにおける森の構成要素を分析していく上で、まず、「動くもの」と「動かないもの」に分類可能である。後者の「動かないもの（＝事物）」はさらに、樹木に代表される植生や、石、岩、泉のごとく森の内部に自然に存在する「自然の事物」と、家や灯りのように人の手が加わった「人工の事物」とに分類される。本論考では前者の「自然の事物」のみを取り扱う。森の中で登場人物が遭遇する「人工の事物」、あるいは「動くもの」についての論考「グリム・メルヒェンにおける森の諸相（Ⅱ）」は、次号に譲る。
- 2) Vladimir Propp (Übers. v. Christel Wendt): *Morphologie des Märchens*. München 1972. (ウラジーミル・プロップ著、北岡誠司、福田美智代訳『昔話の形態学』、風の薔薇、²1991年) Vladimir Propp (Übers. v. Martin Pfeiffer): *Die historischen Wurzeln des Zaubermärchens*. München/ Wien 1987. (ウラジーミル・プロップ著、斉藤君子訳『魔法昔話の起源』、せりか書房、1988年)
- 3) 大野寿子「グリム・メルヘンと通過儀礼——森に表れる死と再生の図式——」、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」10 (1996)、38-61頁。
- 4) Vgl. Max Lüthi: *Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen*. Tübingen ⁸1985, S. 21.
- 5) テキストには、Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 2 Bde. 7. Aufl. Göttingen 1857 (nachgedr. u. hg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 2001) を使用する。レレケの

このシュトゥットガルト（レクラム）版には、グリム兄弟自身が執筆した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』注釈書が、第三巻として収められている。

- 6) 通し番号として KHM201-210の番号を採用する。
- 7) 現在のラインラント＝プファルツ州に位置するライン川東岸のノイヴィート（Neuwied）付近には、ライン＝ヴェスターヴァルト自然公園（Naturpark Rhein-Westerwald）と呼ばれる広大な緑地が広がっている。しかしながら KHM39のヴェスターの森は、「ヴェスターの森ほどに歳をとっている」という意味で、古いものの比喩表現として用いられた。グリム兄弟は KHM 注釈書において、デーネルトの『低地ドイツ語辞典』556頁に記された、「ボヘミアの森ほどに歳をとっている」old, as de Bemer Wold という、古いものを森にたとえる同様の慣用表現を挙げている。Vgl. Brüder Grimm (Nachgedr. u. hg. v. Heinz Rölleke) : *Kinder- und Hausmärchen*. Bd. 3. (Göttingen 1856.) Stuttgart 2001, S. 67.
- 8) ハンス＝ヨェルク・ウーター編集『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（全四巻）の第四巻索引には Wald の項目があるが、そこには KHM から62話、KL から5話のみが挙がるに留まる。Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 7. Aufl. Göttingen 1857 (nachgedr. u. hg. v. Hans-Jörg Uther. München 1996). この KL は、KHM 第二版以降に設けられたカテゴリー（第二版から第五版までは9話、第六版以降10話となる）であるため、本論ではときとして除外することもある。しかしながら、KL9 (KHM209)「天上の婚礼」のように、KHM 第一版においては第二巻35番（第一版は第一巻と第二巻の間に通し番号が存在しなかった）に収められていたものが、第二版以降 KL に移された例もあるので、その点は臨機応変に考えることとする。
- 9) 方言形式の単語を別個に考えれば、森に付された形容詞の種類は全体で17種類となる。
- 10) 同じ話の中で、同じ形容詞が何度も使われる場合でも、一回（一話）と見なす。
- 11) Max Lüthi: a.a.O., S. 26.
- 12) Ebd.
- 13) 竹原威滋は、リューティの研究対象はグリム以後の「近代メルヒェン」と見なす。竹原威滋『グリム童話と近代メルヘン』、三弥井書店、2006年、37頁参照。
- 14) 善人ならば「白」、悪人ならば「黒」で象徴されるというリューティのメルヒェン論が成立する以前に、ヴィルヘルム・グリムは「メルヒェンの本質について」において以下のごとく語っている。「善と悪の対立は、しばしば白と黒、光と闇という表現が用いられる。援助の手をさしのべてくれる善良な精霊たちのほとんどが白い鳥であり、それらは美しくおだやかなハトとよばれている。しかし、邪悪で災いを告げる霊は黒いカラスである。それは北歐神話では黒エルフと白エルフなのである。」Vgl. Wilhelm Grimm: *Kleinere Schriften*. (künftig WGKS) Berlin 1881-87. Nachdr. Olms. Hildesheim/ Zürich/ New York 1992, Bd. 1, S. 341. 邦訳に

- は野口芳子訳を参考にした。(vgl. 野口芳子「序章、メルヒェンの本質について」、関西学院大学文学部「ドイツ文学研究室年報」XVII, XLIII (2002)、51-78頁参照。)
- 15) 森で何かを経験したり、物語の後半に森から出るという行為が続く場合が多いが、いずれにせよ、森に入った状態であることが前提となるので、ここでは入る行為で統一する。
 - 16) メルヒェンの物語の進行は、主人公がたどる道に如実に表れている。カタリン・ホルンは次のように語る。「道というものは方向性を示し、出発点(始点)と目的地(終点)を結び、決断を要求する。」「人生の道、運命の道、人間の行為と試練の舞台、楽であったり苦であったりする振る舞いの場、正当であったり罪深かったりする振る舞いの場、計画と実行の空間的象徴化——このようなものとして道は、精神的産物にその形象を与えるのである。」Vgl. Katalin Horn: *Der Weg*. In: Jürgen Janning u. Heino Gehrts (Hg.): *Die Welt im Märchen*. Kassel 1984, S. 22.
 - 17) 「森は、人間の経済活動と密接に結びついており、そこにただ存在するだけで意義がある。しかしながら、そこに向かいそこから出るという人間の実際のかつ精神的営為、実際的な方向性と精神的志向性、すなわち上述のベクトル記号〔方向性の意〕を伴うことによって、一層その存在意義を深めるのである。」大野寿子、前掲書(1996)、54頁参照。
 - 18) 主人公が森に留まる数少ない例は、KHM141「子羊と小魚」である。
 - 19) Vgl. Antti Aarne u. Stith Thompson: *The Types of the Folktale. FFC. 184*. Helsinki 1964. このメルヒェン・インデックス集は、1910年にドイツ語で作成されたアールネの『メルヒェン・タイプの索引集』(Antti Aarne: *Verzeichnis der Märchentypen. FFC. 3*. Helsinki 1910.) にトンプソンが加筆し、英語で再編したものである。五つの分類項目とは、I. 「動物メルヒェン」Animal Tales (Tiermärchen)、II. 「本格メルヒェン」Ordinary Tales (Eigentliche Märchen)、III. 「笑い話と逸話」Jokes and Anecdotes (アールネでは Schwänke のみ)、IV. 「定式化した話」Formula Tales (トンプソンが加筆)、V. 「その他」Unclassified Tales (トンプソンが加筆) である。アールネのもともとの分類では、動物メルヒェン、本格メルヒェン、笑い話の三つの分類項目しか設定されていなかったこと、また、トンプソンによる改定版においても、全2499タイプの大半を占める AT1 から AT1999 までが、上記の三つの分類項目内に収まっている。このような理由により、五つ全部ではなく前三つの分類項目を重視する。また、第二番目の「本格メルヒェン」は、「魔法メルヒェン」と意識されることも少なくない。同書については、2004年にハンス＝ヨエルク・ウーターによる改訂版が出版されている。Vgl. Hans-Jörg Uther (Hg.): *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography. Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson*. 3 Bde. FFC284-286. Helsinki 2004. しかしながら、基本的な枠組みについての大きな変更はなく、本論稿では1964年版の『民間伝承のタイプ集』(通称 AT) を使用した。(ウラジーミル・ブ

ロップによるメルヒェンの形態論的分類研究の材料となった「魔法メルヒェン」とは、ATの「本格メルヒェン」のことである。）

- 20) 動物メルヒェンで、行為と比喩表現が重なっているのは KHM171 である。
- 21) KHM147 は例外。
- 22) しかしながら、たとえば「灰かぶり」のように（この話に森は登場しないが）、もともと「木」Baum であったものを、「ハシバミの木」Haselnußbaum と書き換えたり（第二版）、あるいは KHM1「カエルの王様、あるいは鉄のハインリヒ」のように、もともと登場してはいなかった「菩提樹」Lindenbaum を森に書き加えた例もあるので（第三版）、グリム兄弟自身が樹木各種の象徴性を意識していた可能性は高い。
- 23) Max Lüthi: a.a.O., S. 26.
- 24) このような樹木の形状や属性をてがかりに、森における樹木の機能を大きく五つに分類した資料をまとめ、補遺として示す。
- 25) KHM. Bd.2. 7 Aufl. (2001), S. 108.
- 26) Ebd., S. 339.
- 27) KHM. Bd.1. 7 Aufl. (2001), S. 364.
- 28) 豪華な衣装が入っているクルミの実は、KHM65「千枚皮」にも登場する。また、KHM88「歌いながら跳ねるヒバリ」では、主人公が怪鳥グライフに乗って夫を探して海を渡るときに、北風からクルミの実をもらう。その実を海に投げ入れると即座に芽が出て大きなクルミの木になり、グライフの休憩場となる。いずれの話にも森は登場するが、クルミと森とが直接関わる話ではないので本論考では割愛した。
- 29) Kraut にはキャベツという意味もある。たとえば KHM42「名付け親」では、名付け親（悪魔）の家に転がっていた死者の頭のことを、悪魔は「キャベツ頭」Krautkopf と呼んでいる（比喩表現）。また Kraut は、ジャガイモやカプラの食用にならない葉や茎の部分を指す。さらに複数形の Kräuter になると、「薬草」、「香草」だけではなく、大木に対する「草本」そのものを指すこともある。Kraut (Kräuter) が森に登場する場合には、野生であることがほとんどなので、コンテクトにより「キャベツ」ではなく「草」もしくは「薬草」と訳される。（たとえば KHM66「小ウサギの花嫁」にあるように、普通は Kohl を「キャベツ」と訳す。この話では、キャベツは畑で栽培されている。）
- 30) KHM13「ラプンツェル」における「茨」は、第六版で加筆された語である。また、KHM53「白雪姫」の「茨」も、エーレンベルク稿には存在せず、第一版から登場する。大野寿子「グリム兄弟における理念としての〈森〉」、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」第16号、2002年、68頁参照。
- 31) 百年の永きにわたって眠る姫を保護し続ける KHM50「茨姫」の「茨」は有名であるが、この「茨姫」には森が登場しないため、本論考では割愛した。

- 32) Staude は、標準ドイツ語では「地下茎で越冬する多年生草本」を意味するが、南ドイツでは Strauch (藪、低木、灌木) と同じ意味で使われる。ここで用いた KHM の二つの話の中で、まず KHM210 「ハシバミの杖」は、フォンブンの『フォアアルベルクの民間伝説』(J. F. Vonbun: *Volkssagen aus Vorarlberg*, Wien 1847.) に収録されていた「聖母と毒ヘビ」(Die Muttergottes und die Natter) を範とし、1850年刊行の KHM 第六版から KL10 (KHM210) として収められたものである。また、KHM166 「強力ハンス」はヴィルヘルム・グリムが、バーゼル出身のカール・ルドルフ・ハーゲンバッハ (Karl Rudolf Hagenbach) が語ったスイスに伝わる話を書き留め、1837年刊行の KHM 第三版より KHM166 として加えたものである。双方とも、もともとはドイツ南部に隣接する地域 (国) の話であり、南部ドイツ方言とよく似た方言を使う地域でもあるので、本論考では Staude を「灌木」と訳す。
- 33) KHM. Bd.2. 7 Aufl. (2001), S. 304.
- 34) Ebd., S. 342.
- 35) Ebd., S. 305.
- 36) この直後にハンスがやってくる別の森は、「深く暗い森」in einen tiefen und finstern Wald となっている。他の描写の例から言っても、KHM166は、森の自然を非常に豊かに表現している話の一つである。
- 37) KHM. Bd.2. 7 Aufl. (2001), S. 288.
- 38) KHM. Bd.1. 7 Aufl. (2001), S. 198.
- 39) 『千夜一夜物語』の影響を受けていると考えられる話である。
- 40) 森に所属しない泉 (井戸) が舞台となる話には、KHM24 「ホレおばさん」や KHM25 「七羽のカラス」がある。後者の泉は洗礼用の水を汲む場所となり、そこにつばを落とすことから話が展開してゆく。前者では、主人公である少女が「糸巻」を井戸に落とし、それを拾いに井戸の中へと飛び込むこととなる。井戸の底には草原が広がり、焼きあがったパンをパン焼き釜から出す、木をゆすりリングの実を落とすという二つの課題を経て、ホレおばさんの家へとたどり着く。KHM116同様 KHM24でも、井戸の底に異質な世界が存在しているが、水の存在を度外視すれば両者とも、「地下世界」という意味での異界のヴァリエーションと解釈できる。(異界のその他のヴァリエーションとして「遠方世界」や「天上世界」がある。)
- 41) KHM. Bd.1. 7 Aufl. (2001), S. 270.
- 42) KHM. Bd.2. 7 Aufl. (2001), S. 186.
- 43) Ebd., S. 307.
- 44) Ebd., S. 309.
- 45) KHM8 「おかしな辻音楽師」の森には、「明るい間伐地」eine lichte Stelle が存在する。これは、単に物理的に樹木が無いというだけではなく、そこに光が差し込

み「明るい」という原義に基づき、その場に到着した人間の心理をも包括して表現しうる。

- 46) WGKS. 1, S. 334f. 邦訳には野口芳子訳を参考にした。野口芳子、前掲書 (2002)、52頁参照。
- 47) KHM. Bd.1. 7 Aufl. (2001), S.80.
- 48) Ebd., S.352f.
- 49) KHM. Bd.1. 7 Aufl. (2001), S.108.
- 50) Ebd., S.104.
- 51) Ebd., S.72.
- 52) Ebd., S.279.
- 53) KHM. Bd.2. 7 Aufl. (2001), S.130.
- 54) KHM. Bd.1. 7 Aufl. (2001), S.279.
- 55) KHM. Bd.2. 7 Aufl. (2001), S.180.
- 56) 樹木と鳥という設定で主人公に不思議な贈り物が贈られる顕著な例とは、KHM21「灰かぶり」のハシバミの木と白ハトがある。ただし、森の中ではないのでここでは割愛する。
- 57) Ebd., S.245.
- 58) Ebd., S.79.
- 59) 伐採される目的である「木」が、Baumではなく Holz という語で登場する話は、KHM3、9、15、23、31、37、46、64、99、90、99、106、127、128、183の15話である。KHM9では目的が「料理用」 zu Kochen と明示してあるので「木」もしくは「薪」、KHM127では「小さな薪の山」 ein kleines Häufchen Holz であり、いずれも「用材」としての「木」であることが明白である。また、KHM37では、「木を伐採することができる場所」 Platz, wo das Holz gehauen ward とあるので、ここでの Holz は「木材」ではあるが、Baum に近いイメージで用いられている。また KHM106では、「銀でできた建材木」 Bauholz von Silver が登場する。上記の15話の中の KHM23と KHM90、それ以外の KHM165, KHM166、合計4話では Holz が「木」、「木材」ではなくその集合体である森の意味でも登場している。
- 60) KHM. Bd.1. 7 Aufl. (2001), S.36.
- 61) Ebd., S.347.
- 62) Ebd., S.332f.
- 63) KHM. Bd.2. 7 Aufl. (2001), S.180.

Verschiedene Aspekte des Waldes in den Grimmschen Märchen (I)

— Über die natürlichen Elemente —

Hisako ONO

Dieser Aufsatz klassifiziert die Schilderung des Waldes in natürliche und künstliche Elemente und stellt besonders detailliert seine Natürlichkeit dar, um meine bisherigen Forschungen zu ergänzen und um Materialien und Argumente dafür anzubieten, dass die Brüder Grimm Gefühle und Eigenschaften der Märchenfiguren auf die Natur bzw. auf das äußerliche Bild des Waldes und auf seine natürlichen Elemente projizieren wollten.

In 101 der insgesamt 210 Erzählungen (inklusive Kinderlegenden) der 7. Auflage der Kinder- und Hausmärchen (künftig KHM) kommen Darstellungen von Wäldern vor, wobei alltägliche und wundersame Elemente nebeneinander, lebensfreudig-positive und lebensgefährlich-negative Seiten zweideutig existieren können. Die Adjektive, die das Wort „Wald“ bestimmen, sind auf 14 begrenzt: groß, ganz, wild, finster, dunkel, einsam, dick, schön, grausam, gefährlich, tief, schwarz, grün und benachbart. In 101 Erzählungen mit dem Wald gibt es bei 89 Märchen die Entwicklung, dass die Hauptfiguren, egal ob Mensch oder Tier, vom Anfang an nicht im Wald sind, sondern in den Wald hineingehen. In 4 der 101 Erzählungen bleibt der Wald nur eine poetische Formulierung.

Unterteilt man diese 101 Erzählungen in 14 „Tiermärchen“ und 87 „Menschenmärchen“, in dem kein Tier, sondern ein Mensch die Hauptrolle spielt, dann zeigt sich, dass bei 7 der 14 Tiermärchen die Hauptfiguren in den Wald hineingehen, bei 6 Märchen im Wald bleiben, und bei einem der Wald nur als poetische Formulierung vorkommt. In den 87 Menschenmärchen gehen die Hauptfiguren dagegen bei 82 Märchen in den Wald hinein, nur bei je einem Märchen bleiben sie im Wald bzw. neben dem Wald, und bei 3 Märchen kommt der Wald nur als poetische Formulierung vor. Daher zeigt sich, dass bei 50% der Tiermärchen die Hauptfigur in den Wald hineinght, während es bei den Menschenmärchen 94% sind.

Bei den Menschenmärchen lässt sich die Motivation, in den Wald zu gehen, in 7 Gruppen klassifizieren: 1. Tagewerke wie Arbeiten und Nahrungssuche besonders durch die armen Leute der Unterschicht; 2. Vergnügungen wie Spiel, Jagd und Gespräch durch die reichen Leute der Oberschicht; 3. Zuflucht oder Ausweichen vor Gefahr; 4. als Prüfung und zur Suche; 5. durch Ratschlag, Versprechen und Befehl; 6. aktives Liegenlassen (Erwachsenen) und passives Liegengelassen werden (Kinder); 7. absichtliche und unbeabsichtigte Durchquerung während einer Wanderung.

Die Anzahl der Märchen, in denen Bäume eine große Rolle spielen, beträgt in der 7. Auflage

der KHM insgesamt 51. Besonders Bäume, die nicht außerhalb, sondern innerhalb des Waldes stehen, finden sich in 42 Erzählungen: manchmal mit begrenzten Adjektiven (alt, ausgerissen, hohl, groß, mächtig, hoch, gefährlich und klein); mit symbolischen Attributen (voll schöner Früchte, mit Bienennestern, Honig, mit Vogelnestern, mit Vögeln); mit Zuständen wie „bis an den Himmel gewachsen“, „etwas darin“ und „den Mond daran befestigt“. Bäume stehen also für mindestens 5 Ziele: 1. Unterkunft oder Schutzort; 2. Observatorium oder Wachstelle; 3. Ort, wo man etwas Wundersames herausfinden kann; 4. Ort, wo man wundersamen, beratenden Kreaturen begegnen kann; 5. Detaillierte Bäume bzw. Bestandteile des Baumes tauchen auf und spielen die folgenden Rollen: Holz als Brenn- und Baumaterial; Laub und Blätter, um z.B. Sonnenstrahlen oder Windstärke sinnlich darzustellen; Äste und Zweige oder der Stamm als Material, um Naturerscheinungen eindrucksvoll zu schildern; Wurzeln oder ihre Nähe, wo man etwas Wundersames erfinden oder wundersame Figuren sehen kann. Die Vegetation im Wald hat folgende Funktionen: Beeren als Nahrungsmittel und als Motivation des Eindringens von Mädchen in den Wald; Nüsse, teils als Attribut des Baumes, teils als Material für das Verbergen der außergewöhnlichen Wunderkleider; Kräuter als Nahrungs- oder Heilmittel für alle Krankheiten; Dornen oder Dörnchen als Mittel, um jemanden zu verletzen, oder als Verstärkung des Schmerzes; Busch, Gebüsch, Sträucher und Stauden um sich zu verbergen; Blumen führen immer zum positiven Eindruck; Moos funktioniert wie ein Bett, Wiese und Wald treten manchmal nebeneinander auf und formulieren eine Alliteration; mit dem Gras kann man den Wald detaillierter betrachten. Dann gibt es die Brunnen als Eingang zum Jenseits oder Sitz der Wasserleute; Steine als Hindernisse des Laufens; Felsen als Wohnort der Wunderfiguren, als Schatzkammer usw. Damit kann man sich überzeugen, dass der Wald in den KHM äußerlich einfach und geheimnisvoller aussehen kann, während er innerlich sehr funktionsmäßig detailliert dargestellt wird.